

## 田中 真理子（たなか まりこ）

准教授

専門分野／日本文学、日本語表現。



筑波大学大学院博士課程文芸・言語研究科単位取得。修士（文学）。東京成徳短期大学ビジネス心理科を経て、平成 21 年現職。

著書：『和歌文学大系 別離/一路』（明治書院）、『コレクション日本歌人選 斎藤茂吉』（笠間書院）他。

### 「青玉のから松の芽」のごとき学生時代

我が家の狭い庭も、花が咲き緑の濃い時期は、それなりに華やいで見えるのですが、冬になると、木立が寒々しく震えています。そうした木々を寂しくて、つまらないと思うこともありました。けれども、斎藤茂吉（大正・昭和の歌人）の中に次の短歌を見つけてからは、木立の芽吹きを待つ季節がととても好ましく感じられるようになりました。

青玉のから松の芽はひさかたの天<sup>あめ</sup>にむかひて並びてを萌ゆ

「玉のようなカラマツの青い芽が、遠い天に向かって伸びようと、並んで芽吹いていることよ」という内容で、はち切れんばかりに萌えだそうとしている芽の力強さと清新な美しさが捉えられています。カラマツの芽吹きが見られるのは信州などでは 4 月に入ってからだといいます。真冬の景を詠んでいるわけではないのですが、この短歌を知ってから、冬枯れの木々の中にある、小さな芽の美しさに強く惹かれるようになりました。気を付けてみると、寒さに耐える健気な息吹を至る所で見つけることができます。

寒さに耐えて芽を膨らませる時期というのは、人間でいうと、ちょうど皆さんの年代のことかもしれません。思春期や青年期は、その名前とは裏腹に、辛くて、苦しいことばかりがあって、冬の厳しさに似ているような気がするからです。だいぶ前に「若いという字は苦しい字に似てるわ〜♪」という歌が流行しましたが、確かにその通りで、青春は苦しいことが沢山ある時期だと常々思っています。いくらでも新しい自分を開拓していくことができるということは、逆に言えば、確かなものは何一つないということにもなるのでしょう。実際は、年を重ねても、先が見えてくるわけではないのですが、若い時が、明るく、希望にあふれていたとは、私も感じませんでした。

とはいえ、そうした試練に耐えて自分の夢を育み、自分の芽を伸ばそうとする皆さんは、春の芽吹きを待つように、やはり美しく、素敵な時代にいるのでしょうか。学生のみなさんの誰も彼もが、輝く青玉のカラマツの芽のように、遠い未来に向かって伸び行こうとしているのを日々感じています。もし、苦しくて、行くべき道が見えなくなったような時があったら、その時こそ、芽を出して花を咲かせようと力を蓄えている時期なのだと信じ、辛さに打ち勝ってもらいたいものだと考えます。私自身も、そうした皆さんと接することのできる時間を大切にして、生き生きと過ごしたいと思っています。